

令和7年度 第6回 岐阜市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和8年1月23日（金）14時30分～16時00分

2 場 所 岐阜市庁舎 12階 第1・2研修室

3 出席者 柴橋市長、伊藤委員、加藤委員、小森委員、益子委員

4 傍聴者 一般2名

5 次 第 (1) 市長あいさつ

(2) 報告

(3) 協議

「年間総括」

7 議 事

(14時30分開会)

(1) 市長あいさつ

(2) 報告

① 事務局説明

(資料1 教育職員に関する「業務量管理・健康確保措置実施計画」の策定及び実施に向けて)

② 質疑応答

(3) 協議

① 事務局説明

(資料2 今年度の総合教育会議における協議成果及び次年度の協議事項について)

② 意見交換

【報告 質疑応答】

●市長

働く時間をマネジメントすることは大事だが、その中で特に若い先生方がどのようにスキルを高めて、教職員のプロフェッショナルとして成長していくかということをしっかり担保していかないといけない。これまで様々な機会を通じて先輩の先生方にご協力いただいたり、研修を重ねていたり授業の準備等についてもご指導いただいていたようなことを無くし、働いたらすぐ帰るとなると、結局子どもたちに影響するので、時間を短くするとしてもパフォーマンスをしっかり維持するということは、教育委員会として責任を持って実施していただきたいというのが市民の代表としての思いだ。

●学校指導課長

この計画を推進するにあたっては、目の前の子どもたち一人ひとりに向き合う時間を確保したい。そのためにも教職員のスキルを高めていく、プロとしての意識を高めていくことが何より大事だと感じている。そうした教員のスキルアップを目指す研修もしっかりと充実させていきたいと考えている。

●教育長

市長から指摘いただいたことについては、教育委員会としてもしっかり考えており、働き方改革に基づいて業務改善を行っていくが、一番は子どもたちと向き合う時間がちゃんと保障されていく改革にならないと先生にとって働きやすさとか働きがいで考えると結局は子どもたちが苦勞するということになる。第2回総合教育会議の際に家庭訪問の話が出たが、働き方改革で先生たちの業務はずいぶんスリム化された一方で生徒指導云々のことも含めてきちんと向き合うことを保証しつつ、先生方の働きがいの向上を同時にやっていかなければいけないと思っている。また、働き方改革の19項目については、校長会に示す際に、学校の校長レベルでできること、市町村教育委員会が頑張らなければいけないこと、県や国のレベルで考えていかなければ学校の校長がどんなに逆立ちしても駄目なことがあるので、見極めつつ整理をして対応していこうと思っている。

【意見交換】

●伊藤委員

今年度5人の先生方から素晴らしいお話を聞かせていただき、大変勉強になった。冒頭市長がご挨拶で公教育という言葉が使われたが、私たちは岐阜市の公教育を担っているということを改めて感じ、身が引き締まる思いだ。やはり公正な質の教育を岐阜市で実現したいということを改めて感じている。

最初に、他者との違いを理解するというお話をしていただいたが、学校の先生たちが生命の尊厳について大切なものだということを子どもたちにお伝えいただく際に、急に命という言葉が発せられるので、子どもたちがあまりピンときていないのではないかと思っている。まずは、自分と他人との違いを理解することから始めて、そこで自分の価値を認める相手の価値を認める、そこから命を守るということに繋げていくべきではないかと思う。子どもたちにとって、自分と他人の違いを理解することが究極的には他者の命を守る、自分の命を守ることに繋がるのだと私達も理解すべきではないかと思う。

続いて、教職員の働きがいと人材育成についてお話をいただいた中で、もう働き方改革ではなくて働きがい改革だということが当たり前言葉として出てきていることがありがたいと思った。民間企業はワークエンゲージメントという概念が一般的になっているが、教職員にも浸透してきているところだ。本来、学校現場は民間企業と違って利益を追求するところではないので、子どもたちのためにという崇高な理念を持っている学校現場であれば、民間企業よりも浸透しやすいはずではないかと従前から思っていた。可能であれば、この尺度をKPI等で数値化していただきたいと思っており、教職員の方の満足度、離職率などはもちろん、教職員、教員という仕事を知人に薦められるか、子どもたちにいい仕事だからぜひ頑張れと言ってあげられるか、そういった尺度でも測ることができるかという良いのではないだろうか。

そして、第3回から5回については、藍川北学園の取組が今年度の大変良かったことの一つだ。現場を見ても異年齢交流がうまく取り入れられていると強く感じた。今までも学校での異年齢交流は行われていたが、どちらかという上級生が下級生のお世話する、ケアするといった交流にとどまっていたが、それが藍川北学園では学びに進化していたことが今までと異なる進め方だと感じているので、ぜひその学びに繋がられるような異年齢交流を他校でも平準化していただきたい。先ほどの働きがいにもつながるが、授業の準備をする時間が取れないとドライな授業になってしまうし、実際そうなりつつあるのではないかと率直に思う。小学校でいえば、先生方が毎日専門ではない教科も教えていかなければいけない中で、どのように先生方が自分自身の予習をしていくのかという点については、もう少し限られた教科で予習準備をしてもらいたいと思う。だから、教科ごとに専門性のある先生にお願いできる授業も、もっと増やしていただければと思う。藍川北学園ではそういった取り組みも進んでいるかと思うので、横展開していけるよう来年度に繋げていきたいと思っている。

●加藤委員

どの回も非常に興味深い内容で、私自身も第3回の内容であったように子どもたちの発達段階に合わせた教育をどう作っていくかが重要だと思っている。今の教育は過渡期にあり、何を本当に大事にして行っていくのかが問われている。できたら良いこと全部はできないので、何を大事にしていくかということをもう一度立ち返り考えていく必要があると強く思っている。先生方も従来の集団的な教育をしたいだとか、みんなで一緒に感動したいだとか、そういったことを未だに行っていることも多い。個別最適に相いれないものが多いにもかかわらず、同時進行で行っていることに無理があると思う。以前は、集団としてうまくクラスを運営することが学校としては優先事項にされていたが、変化してきた教育の在り方に相容れないもの続けていることをどのように対処していくか、そのバランスが大事になってくる。

実は教育現場で一番大事なことは、大人が子どもの発達と多様性を理解し、その知識を持ったうえで子どもたちを見ていくことだと思う。何年生だからこうと決めつけるのではなく、この子の育ちの中で今どのフェーズにいるのかといったことを先生方が見極めることが大事で、その育ちをサポートしてポートフォリオのように繋げていくことが求められていると思う。一方で、共通テストが終わったばかりだが、日本の教育は高い次元のことを子どもたちに課している。公教育がどこにフォーカスを当てて行っていけば良いのか分からないような情勢にあって、どのラインを重視するのか考えていく必要があると思う。とにかく日々子どもたちをサポートしていかなければいけない中で、最初に申し上げたように先生方が子どもをしっかりと知っていてほしい。そのためにも、先生も子どもも安全感を持って学校で過ごすにはどうしたら良いか一層考えていきたいと思っている。今の子どもたちは、生成AIを大いに活用している。作文でも、生成AIに文章を書かせてそれを自分なりに直して提出しているような時代になっており、子どもの方が吸収も早い。外来診療に来る子どもたちも、悩み事を生成AIに相談している子が非常に多い。本当は生身の人間に相談できると良いが、それに伴って起こる色々な問題や葛藤を避けて、当たり障りのないAIに相談するという状況が今生まれている時代にあって、どう子どもたちをサポートするのか、どのように教育を行っていくのか考えていかなければいけないと思っている。

●小森委員

総合教育会議そのものとは別に、京都の視察に行かせていただいて非常に学びがあったと振り返っている。同志社中では、教科センター方式の最先端、大原学院はコミュニティに根差した義務教育学校で、それぞれ非常に特色のある様子を見せていただき、岐阜市が教科センター方式の義務教育学校という形の組み合わせを行ううえで、戦略的な視察であった。それぞれ義務教育学校だからこういう形だ、教科センター方式だからこういった形だと、そのまま取り入れることが全てではなく、我々の地域や施設に合った形で取り入れていくべきエッセンスを現場の方とお話をする中で学ぶことができ、学校の運営にも生かしていくことができるのではないかと感じた。

今年度第1回では、他者の価値の理解ということで、多様な価値観との共生は教育の場面だけではなく人間の生きる根本のようなものであり、他者と折り合いをつけていくことは大変だけれど

も、うまくいくと幸せな人生を送ることができる。価値観の異なる他者と触れ合わない人生はおそらくつまらないと思うので、その大切さを改めて再確認させていただいた。その後、後半にかけて子どもを主語にするというキーワードのテーマが続いたが、岐阜市の掲げる子どもファーストという言葉には色々な受け取り方がある中、保護の客体として大事にするということではなく、子どもを主語にしていくという面での意味が見えたかと思う。藍川北学園の生徒さんの話に意見を言いやすくなったという意見があったが、子ども一人ひとりが考えを持ち自分の意見を発言するということは、考え方の異なる他の子の意見を聞くことができるということで、他者の価値を理解していくことにつながる。すなわち、子どもが主語になるということと他者の価値を理解することは往還関係にあると感じ、良いスパイラルで広がるよう、今後の取り組みに繋げていきたいと思う。また、第4回の未来の学校研究会の提言内容は特に印象に残っている。市内の校長先生方が一生懸命考えられ、短期的な問題だけでなく、中長期を見通した子どもが学びの主体となるための方策の内容は、著名な有識者の話と全く遜色がなく、本当に心強く思った。その際にも申し上げたが、校長先生方が考えておられることを児童生徒や保護者の方に広く知っていただきたいと思ったので申し添える。

そのうえで、次年度の協議に向けて2点お伝えしたい。1点は、問題行動調査で暴力行為が増えていることを懸念している。色々な要因があることはご教示いただいているが、最近 SNS やニュースなどでも、学校内での暴力行為が拡散したといったニュースも目立っている。規律規範の点において、数十年前に比べると、自由になり、自分たちで話し合って不要なルールを廃止し必要なルールに変えていこうとするのは非常に好ましいことではある一方で、必要な規律や守るべき規範は厳然として残していかなければいけない。ルールに関する根本的な考え方、いわば本来人間は自由であるが、社会や学校で物事を進めていくためにはルールが必要だから、作ったルールは守るべきという話であり、自由というワードが強調される中で本来守るべき規律規範をどう押さえていくかというのも一つの課題ではないかと思う。自由と規律規範のバランスを子どもたちや保護者に理解していただきながら伝えていくことの検討が必要ではないだろうか。それと関連して、家庭と学校との関係について、子どもたちの教育のために学校と家庭の協働、連携は当然必要だが、学校の先生方と家庭での役割について、線引きが学校に寄り過ぎていないかと感じている。最近の教育委員会定例会でも報告があったが、学校と関係のない SNS のトラブルにかなり振り回されてしまっている。いじめ防止法に記載があるため学校が対応せざるを得ないが、問題の対応はするとしても、解決の主体は本当に学校なのだろうか。トラブルの前後の子どもへの一定の指導はされるべきだとは思いますが、なんでもかんでも学校任せという風潮があるのではないかという点において、学校と家庭が担う本来の守備範囲がどこにあるのか、学校と家庭でどのようにコンセンサスを図っていくのか検討することが必要ではないかと感じている。

もう1点は、発達障害の児童生徒の方や保護者に対しての接し方によるトラブルが増えているような印象を持っている。発達障害の特性を持つ児童生徒をどのように教育をしていくかという側面も大切であるが、マンパワーや予算にも限界があるので、多様な児童生徒がいる中で学校機能を維持しつつ、個別の事案への対応においてどのような観点が大切なのかということは、個々の先生方のスキルに任せるだけではなく、全体としての方針がある程度必要ではないだろうか。これだけ発

達障害がクローズアップされている中で、一定の割合で特性のある方がいらっしゃる現状であるから、その方策を考えることも意義のあることだと思っている。

●益子委員

今年度の成果として2点指摘したい。まず1つに、教師主導から児童生徒主体の学び重視への転換このイメージが議論を通じて具体化明確化されたことが一つの大きな成果である。

例えば主体的な学び、探究的な学びの実現にあたり、幼少連携、小中一貫教育という学びの連続性の保障、好き・得意に応じた探究活動の重要性、異年齢集団活動における多様な価値観に触れる機会など、学び重視への転換が、いくつかの具体的な場面としてみなで議論できた。これにより、岐阜市における今後の児童生徒主体の学びがどのようなものになるか明確になったと思う。

教師の働きがいや成長を味わせる仕組みの重要性が議論されたことは、個人的には2つ目の成果である。教職員の働き方改革は業務の削減や労働時間削減に焦点が当てられる傾向があるが、教育長がおっしゃったように児童と向き合う時間をいかに確保するかという観点や若い教師からベテラン教師までの経験に応じた業務のあり方の検討といったものが必要だ。さらに、教職の面白さや同僚や保護者に児童生徒の信頼関係に基づいた効率化と働きがいとリンクするようなシステムを考えていかなければいけない。これは難しい問題だが、教師の働きがいと児童生徒の学習に対するポジティブな影響があることを総合教育会議で知ったことも私にとって大きな成果だった。

この成果を踏まえ、次年度どのような議論をすべきか考えてみると、児童生徒主体の学びへの転換、教師の働きがいや成長の仕組みをどう実現したらよいかについて協議の余地があると思う。通常、教科指導においては担当指導主事が置かれ、岐阜県では伝統的に小学校中学校の教科指導のあり方を研究する教師の任意団体の研究活動が活発に行われている。しかし、学年や教科の枠を超えた児童生徒の個別最適な学びや探究活動の在り方は、次期学習指導要領では、学校の裁量がさらに大きくなるような議論が今進んでいるところでもあり、教科指導とは別の形で考える価値がある課題ではないだろうか。これを考えるに当たって、一番重要なのは、学校単位の研究、探究活動をどのように活性化するかということではないかと個人的には思う。教師の人数や年齢構成、児童生徒数、その特性は学校ごとに異なる。それゆえに児童生徒主体の学びのあり方や、教師の働き方改革働きがいや成長を味わせる仕組みの実現方法は、学校単位でどのように実現していったらいいか考える研究活動に相当すると考えられるからである。この研究活動の成果を得るために、学校や教師に事務局から指示を与えるのではなくて、可能であれば、学校や教師が主体となって、どのような学校にしていったらいいか、自ら考えながら探究し、その成果を検証していく。そしてその成果が出たら、地域で学校や教師の探究活動が評価されるような活動が私は望ましいと思う。

このような学校の活動をどう活性化するかという面にあまり焦点が当てられておらず、どちらかというと校長の力量に任せて、学校の運営の中で研究していくということが従来のやり方だが、システムとして捉えるという考え方もあるのではないか。例えば、教育委員会事務局の中に教育センターが位置付いている。1990年代前半くらいまでは、色々な教科の新しい教材を自ら作り出すために、学校の教師が一定期間研修員として、集中的に研修、研究開発を行い、それをドキュメントに

して共有するという研究開発機能が教育センターの中に含まれていたが、人員や予算の問題によって徐々に低迷し、様々な企画や研修の機能を果たすような機能に変わってしまっている。こういった研修制度を再現すればよいわけではなく、具体的な新しいアイデアはまだイメージがないが、令和の時代にふさわしい研究開発機能を、教育センターの中でどう実現したらよいか考えることは、学校単位の研究活動を活性化する可能性の一つとして重要だと考えている。

●教育長

今年の総合教育会議は当事者の声を直接聞くことができた。学校経営に携わる校長先生方の次なる一手を聞いたこと、何よりも、その先生方によって育てられている生徒さんの意見もこの舞台の中で聞いたことは大変ありがたかった。また、藍川北学園が開校して、新しい学校の仕組みを横視みしながら色々な話題が出たことは大変良かった。加えて、学びの空間や学校風土といった、人的物的環境の整備について知見を得ることができたことは財産である。逆に、教育改革にはまだまだ面白い視点が多くあると感じたので、個人的にはありがたかった。もう少し踏み込んで話すと、公教育検討会議を実施した際に選択理論が出てきて、選択と行動あるいは自由の相互承認を大切にしながら草潤中学校を開校して、安心できる居場所、信頼できる大人の存在、選択と行動のプログラムは確かに効果があるということで、校内フリースペースのように横展開して考えてみると、選択と行動という考え方は日々の授業の中でも取り入れることができるということで、良い実践や確かな教育哲学は汎用性や転用できる視点があることが明らかになった。だから、良いものを掴めば岐阜市の教育はそれと連動して展開していけるということも言えるし、逆に言うと、元となる哲学が歪んでいると、どんな手を打っても結局は二番煎じになるということを今年は実感した。全国で注目をしていただいている実践もあり大変ありがたく思っている。

異年齢の教育力について、改めて藍川北学園の子どもたちが見せてくれた姿は、いくつか教育の新しい切り口となる。一つは、1年生から9年生という仕組みによって教育が変わったこと。二つ目は、わかあゆ学という仕掛けによって、子どもたちの学びに対しての期待感を上昇させることができた。わかあゆ学を勉強した後は家に帰ってその様子を家族に話すのだと校長から聞いている。そのように、家に帰って今日こういうことを学んだと家族に喋るのが一番良い授業だと思っている。三つ目はストーリーということで、子どもたちが創り出す文化がこれまでにない学校を生み出した。先生が頑張っている良い学校だとイメージしているものと子どもが自分たちで手応えを感じてアップデートしていくものは異なると思っている。そういう意味では、総合教育会議を媒介としながら、岐阜市の教育の面白い部分が見えたと思っている。

来年度に向けて、2点お伝えしたい。1点は、子どもにとっての明日もまた来たい学校を掘り下げていくべきだと強く思っている。全国でいうと35万人、岐阜市でも1185人から今年どうなるかわからないが、300人の学校4つ分の子どもたちが、今の学校制度は合わないと呼んでいる、子どもたちにとって居心地のいい場所で本当に学びたいところでないと思っていると考えると、そこから次なる教育の在り方を考える必要があると思っている。それは、一斉授業とか中村校長も話されましたけどフェアウェイの狭い学校教育は辟易としている子どもたちがいるのだということを考えると、選択と行動を盛り込むというのが一つ。それから、中教審でも話題となっている好きを育

み得意を伸ばす、そういったグランドデザインが必要だろうということから三つ目には、そのグランドデザインに子どもの願いや思いをちゃんと盛り込む視点が必要だろうと思っている。第5期教育振興基本計画に向けてアードリングを始めたが、スクールミーティングで子どもたちの声をきくと、どこの学校へ行っても、僕たちが決める、決めたいことがある、やりたいことがあると言う。それをきちんと子どもと向き合いながら、グランドデザインを考えていく時代になっているのではないかと思うので、そのあたりが話題になれば良い。

もう1点は、小森委員もおっしゃったように、特色の強い学校や実践に学ぶことが重要だと思っている。多様性の包摂というキーワードがあるならば、学校にも多様性があるので、公立では実現していないような学級のあり方、授業の作り方、学びの場所といった面白い実践を行っているとすればしっかり学んでみるとか。特別活動や生活総合についても、面白い特色のある実践の中からヒントを見つけることができれば良い。最初に市長がおっしゃった教育の質は、教員の指導力の質に間違いなく比例するので、先生方が指導力を身につけようと思うと子どもの発達とか成長に対しての確かな理論や確固たる見方が必要だ。一人ひとりの子どもはそれぞれ違うと言いながら、どうしても学校の先生は一律を求めがちなので、人間の成長や発達についてこの場でも話題にするとヒントが見つかると思う。

●加藤委員

岡本委員のご意見（代読）に中高一貫というワードが出ていたが、私は中高一貫の良さも強く感じている。それは、思春期の嵐のまた真只中で受験をすることのしんどさ見聞きするからだ。発達の幅が広い中学生の段階で高校受験することが辛い子どもたちもいる。それを思うと、6年かけて思春期の時期を育てることも良い方法だと思い、小中一貫の良さ、中高一貫の良さも様々あるだろう。おそらく一つの学校で色々なタイプの子どもに対応することは難しいので、色々な学校があり選択できるようになることもよいと思う。

●伊藤委員

来年度に向けたキーワードに官民連携の可能性があるが、民間の私たちからしても、もっと学校側の何かお役に立ちたいという気持ちが強いが、一般企業からすると、何をお手伝いしたらいいのかわからない、想像ができないというところがあるので、ぜひ教育長をはじめ、こんなことを手伝って欲しいといったことを私達も含め声掛けしていくような企業の経営者の方にお話する機会を来年度もっと増やしていただいて、何かご協力いただける方はこの窓口をお願いしますというシステムが出来上がると良い。ぜひご検討をお願いしたい。

●教育長

GifuMirai で人材名簿もずっと作っており、GifuMirai そのものも浸透してきたので、結構地域と連動する学校は増えてきた。岐阜市の色々な企業の方や経営者を含めて、来年度は世界と繋がるという視点も一緒に踏まえて、岐阜県出身の世界で活躍している方を繋ぎながら、そういった視点

で、色々なところと連携したい。学校は何となく外部と繋がると負担が増えると思いがちだが、逆である。学校が何のために外部人材を招くのかグリップしておくとも効率的に深い学びができるので、進めたいと思っている。

●市長

来年度以降に協議したい5点についてお話したい。岡本委員のご意見（代読）にある中高一貫校は名市大の話だと思うが、名古屋の広沢市長に直接お聞きしたいと思う。まさに岐阜市でも多様な学びが公教育に展開され、通常のいわゆる小学校中学校もあれば、小中一貫義務教育学校もあり、草潤中もあり、エール岐阜での色々な支援の仕方もあり、加えて幼稚園、市岐商、岐女短もある中で、子どもたちの学びたいという思いに、岐阜市の公教育がどのように応えていけるのか。大学の選択肢が少ないという話もしているが、色々な選択肢を作って子どもたちのこういう学び方をしたい、この地域で学びたいという思いと上手くマッチするとよいと思っている。高大連携や高大接続といった取り組みも含めて、いわゆる義務教育から高等学校、高等学校から大学教育への橋渡しという色々なバリエーションを考えていきたいということが1点目である。

2点目に、資料19ページにも適正規模・適正配置の考え方というキーワードがある。また、学校の先生方がより子どもたちに向き合うことに集中していくという意味でいうと、益子委員が研究というテーマで教育センターなどの話をさせていただいたが、本来のいわゆる教職の免許を持っている先生方が行うことと、そうではない分野を我が国の教育現場はしっかりと線引きをしていくことが非常に大事ではないかと思っている。今かなりの部分が学校に委ねられているため働き方改革が必要だという話になるが、本来子どもたちに授業をし、授業準備をする、どういう授業をすることが子どもたちにとって一番の学びに繋がるのかを考えて研修することは、労働強化ではないはずだ。子どもたちが好きで、子どもたちに教育を行いたいという職業選択をされた方にとって、本来行うべきことに時間や労力をかけることは喜びだとした場合に、それが苦や大変だと感じる原因は、そうではない部分も含めて、学校に様々なしわが寄ってきているからではないだろうか。先ほどご意見を言っていたような学校外の問題も、学校内に持ち込まれてしまうといったことは、本来家庭の問題であるから、そういうものをしっかりとこれからの時代にどう切り分けて、先生方に子どもとの学びを最優先していただくかということをお我々としても考えていく必要があると思う。そうしたときに、教育センターのような諸々の諸事を引き受けるセンター機能が存在するには、コストがかかり、何でもかんでも増やすわけにはいかないため、より先生が子どもたちに向き合うためには、適正規模適正配置の考え方も、これらもあわせて全体の中で考えていかないといけない。どこに優先的に市民の皆さんの税金を優先的に配分させていただくのか、全体の議論を行っていくことが大事ではないかと思う。よく適正規模・適正配置というと、子どもの数が少なくなってきたという点だけで議論がされるが、そうではなく、全体の中でどこに優先的に資源配分をし、それが子どもたちや教職員の先生方にとって良いことだという議論を次年度以降できるとよいと思っている。

3点目に、藍東学園が開校予定であるが、藍川北学園、藍東学園の取組をフォローアップして、

未来の学校として良い実践をどう生かすか、横展開についてもこの会議で皆さんと議論ができればよいと思っている。

4点目に、加藤委員も触れてくださったが、少子化の中にありながら、障害特性の子どもたちが一定数上げると増えているのではないかという中で、特別支援教育についてもしっかりと構築していく必要があると思っている。というのも、特別支援学級、特別支援学校での児童生徒数が増加し、キャパシティの限界に近づいている、ほぼ限界ではないかと言われる中で、必ずしも特別支援教育としてのプロフェッショナルが配置されているわけではないのが現実だろうと思う。つい先日まで地域の学校でいわゆる担任をし、今年は特別支援学級の担任ですとか、特別支援学校に配置されたとか、こういったことが一定数起きていたとした場合に、特別支援教育のプロフェッショナルをどう育成をして、子どもたちに適切な教育を提供していくか、あるいはその先生にとっても自信を持って子どもたちと向き合い教育を行うことができるか。これは県教委の人事とも深く関わる問題であると思うが、岐阜県全体で特別支援教育をどのように位置づけ、岐阜市だけ学校数も人数も多く、特別支援学校を持っているという特性もあるが、県教委として全体の中で岐阜県内どこに行っても、特別支援教育について先生方の人材が蓄積をされ、そこで自分が力を発揮したいという先生方がいらっしゃるということでない、子どもにとっても、先生にとっても良くないのではないかと思う。そういった視点も次年度以降持っていきたいと思う。

5点目に、地域との繋がりについて、教育大綱の中には学校・家庭・地域ということで、地域で果たしていただく役割も大きい。わかあゆ学は本当に地域の皆さんに助けていただいているが、そういう学びや授業こそ、子どもたちは覚えているはずだ。私も芋掘りや田植え、地域の中で町の歴史を学ばせていただいたことを覚えている。だから、わかあゆ学は藍川北学園だけの学びではなく、地域の公教育の中に横展開をしていってほしい。例として食農教育の話題を出したが、こういった地域の農家の方や多様な人材資源も含めながら体験することは、子どもたちにとってまさに明日も学校に行きたいと感じられるような機会にもなるのではないか。色々な事業について精査を行う広い入口として、子どもファーストで子どもたちのためという思いを大切にしながら、先生方が生きがいを持って教壇に立っていただけるように協議していきたいと思うので、来年度もよろしくお願ひしたい。

(16時00分閉会)